

はしがき 一本書の編集と刊行にあたってー

今次の阪神・淡路大震災にたいして、多数の社会学者がさまざまな調査や実践を行った。そして、それらはおもに日本社会学会と関西社会学会の場で発表されてきた。そうしたなかから、おのずと「これらの研究成果を歴史の検証、記録として集大成しておこう」という声が上がった。1996年11月、日本社会学会の大会が琉球大学で開かれた折、有志あい集まり7名による編集態勢をつくって、本書刊行への歩みをはじめた。そして、1998年度文部省の刊行助成金の交付を受けることができ、ここに『阪神・淡路大震災の社会学』全3巻が出版されることとなったのである。

日本社会学会は、大震災に対応して1995年から97年までの3年間、研究活動委員会（佐藤慶幸委員長）を中心に3回にわたる大会にテーマ部会「阪神・淡路大震災と社会学」を開設した。当時の『日本社会学会ニュース』はつぎのように伝えている。

「1995年1月17日未明に突然、阪神・淡路地方を襲った大震災は5,500余名の死者を出しただけでなく、家屋の倒壊、ライフラインの遮断、交通・通信網の途絶などをもたらし、都市機能を崩壊させ、住民の日常生活を瓦解させた。一時は呆然自失していた人々は、それでも廃虚の中から生活の再建に向かって力強く立ち上がっている。地震そのものは自然現象である。しかし、破壊や被害の具体的な現れ方はその社会の基本的なあり方によって規定される。また他方、再建と再生の具体的な展開の中から、未来につながる新しい理念と新しい主体が生まれ得る。社会学の調査研究には少なくとも数年の期間が必要であるというのは、おそらく私たちの共通の認識であろう。震災後まだ数カ月という時期に敢えて部会を置いた主旨は、地震国日本に住む私たちにとって避けることのできない震災をめぐる社会的な総合研究の、これからの発展と蓄積を願うからである」（『ニュース』No.154, 1995年8月3日）。

初年度の部会が拙速のそしりを恐れず、被災直後の生の現場報告を主眼とし

ていたのにたいして、翌96年には部会の主題は変えずに、「再生への取り組みと社会学」を副題として添えた。97年度には副題を「震災と日本社会」に変更して、「震災によって明らかになった日本の政治体制や社会構造の問題点」や「震災・災害研究に対処すべき社会学のあり方」などについて論じた。詳細は以下のとおりである。

- ・1995年度第68回大会（東京都立大学，1995年9月24日）
 - 部会テーマ：阪神・淡路大震災と社会学
 - 司会者：鈴木廣，中田実
 - 討論者：浅野慎一，リム・ボン，室崎益輝
 - 1. 似田貝香門・森反章雄「震災による地域社会生活の崩壊と地域社会研究—災害からの復興過程—」
 - 2. 岩崎信彦「都市解体と再生の社会学—阪神大震災から見えてきたこと—」
 - 3. 長田攻一「阪神・淡路大震災と社会学の課題」
- ・1996年度第69回大会（琉球大学，1996年11月24日）
 - 部会テーマ：阪神・淡路大震災—再生への取り組みと社会学—
 - 司会者：小林甫，高田昭彦
 - 1. 浦野正樹「住民の生活再建と地域再生への模索」
 - 2. 中川順子「生活再建過程における家族資源と支援ネットワーク」
 - 3. 荻野昌弘「震災後の住民の対応と住民の反応」
 - 4. 中村順子「コミュニティ再生にかかわるボランティア」
- ・1997年度第70回大会（千葉大学，1997年11月9日）
 - 部会テーマ：阪神・淡路大震災と社会学—震災と日本社会—
 - 司会者：庄司興吉，谷田部武男
 - 1. 似田貝香門「災害ボランティアと『市民社会』のリストラクション：サバイバーズ・スピークアウト（生還者の声は社会を変える）」
 - 2. 伊藤章雄「防災は社会づくり」
 - 3. 鳥越皓之「あらたな公共性を求めて—震災から見た日本社会—」
 - 4. 辻勝次「震災研究と社会学」

さて、関西社会学会においても大震災研究は取り組まれていった。1995年5月に予定されていた第46回大会は会場校の甲南大学が大きな被害を受けたため

に急遽大阪府立大学に会場を移して行われた。シンポジウムあるいは重点部会として研究活動委員会（清野正義委員長）を中心に3年計画で取り組まれたのはその翌年1996年からであった。

96年度は「阪神・淡路大震災—社会学者の見た実像—」というテーマのもとに5つの報告をならべて震災の実像が浮かびあがるようにした。97年度は、愛知県と名古屋市の協力を得て「阪神・淡路大震災—人はいかに避難し、救われたか—」をテーマに市民や行政職員にも開かれたシンポジウムとして行われた。98年度は、復興なった甲南大学で「阪神・淡路大震災—3年余の現実から見えてくること—」が同じくシンポジウムとして開かれた。詳細は以下のとおりである。

- ・1996年度第47回大会（吉備国際大学，1996年5月25日）
シンポジウム・テーマ：阪神・淡路大震災—社会学者の見た実像—
司会者：岩崎信彦，鶴飼孝造
 1. 中川勝雄「避難行動の諸類型—神戸市長田区の事例—」
 2. 宮原浩二郎「被災の社会地図—芦屋市の場合—」
 3. 原田隆司「避難所の多義性—ボランティア体験から—」
 4. 大矢裕美「家族にとっての震災—家族資源とストレス—」
 5. 八木正「都市ライフラインの復旧作業—もうひとつの支援活動—」
- ・1997年度第48回大会（金城学院大学，1997年5月24日）
シンポジウム・テーマ：阪神・淡路大震災—人はいかに避難し、救われたか—
司会者：山本剛郎，松本康
 1. 野田隆「震災下における情報伝達と住民の対応」
 2. 岩崎信彦「さまざまな避難生活と被災者の意識」
 3. 名古屋市消防局防災室「地域社会における防災への取り組み—伊勢湾台風，阪神・淡路大震災の教訓を生かしながら—」
 4. 愛知県総務部消防防災対策室「阪神・淡路大震災を教訓とした愛知県の地震・防災対策」
 5. 渥美公秀「災害ボランティアの広域ネットワークづくり—NVNADと世界諸国の経験—」
- ・1998年度第49回大会（甲南大学，1998年5月23日）

シンポジウム・テーマ：阪神・淡路大震災—3年余の現実から見えてくること—

司会者：森田三郎，野田隆

討論者：浜岡政好，佐藤彰男

1. 小林和「被災者の心・その変遷—精神科医療の窓口から—」
2. 立木茂雄「被災者の生活実態と課題—仮設住宅でのアルコール依存症者への取り組みを中心に—」
3. 吉川忠寛「被災密集市街地の再生と被災者の『主体的共同化』の条件」

以上のほかにも両学会の大会で多くの自由発表が行われた。災害社会学の専門家がごく少ししかないなかで、多くの社会学者が災害に取り組んでいるのは、その強い実証的精神と社会的使命感からであろう。これからも報告者の数に消長はあろうが、日本における社会学の一領域として災害の社会学の研究が続き、根づいていくことであろう。

なお、本書を編集するに当たって、つぎの点をお断りしておきたい。

1. 本書に寄稿された各論説は、調査、執筆時点がさまざまであり、それを統一することはできないので、論説の記述のなかで時点の明示を行うようにした。
2. 編者は誰も専従的にはこの仕事に携われなかったので、採録すべき研究成果で遺漏したものが少なからずあると思われる。また、概説においてもすべての関連文献を網羅することができなかった。関係者のご寛容を乞う次第である。

本書がこのような3巻のシリーズとして完成することになったのは、両学会の会長をはじめ多くの役員の方々、このよびかけに積極的に呼応して下さった61名にもおよぶ執筆者のみなさま、その震災研究を物心両面でバックアップして下さった多くの機関と協力者のみなさま、また厳しい避難生活のなかでわれわれの調査研究に協力して下さった被災者のみなさま、のおかげであります。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

なお、本書は平成10年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」を交付されて刊行したものであります。刊行にさいしては、昭和堂の社主齊藤万

壽子氏からご厚意をいただくとともに、編集部の松井久見子氏、山口暁生氏に丁寧かつ迅速な編集作業をしていただきました。心より感謝申し上げます。

1998年12月20日

編者 岩崎信彦*，鵜飼孝造，浦野正樹，辻勝次*
似田貝香門，野田隆，山本剛郎

(*はしがき文責)